

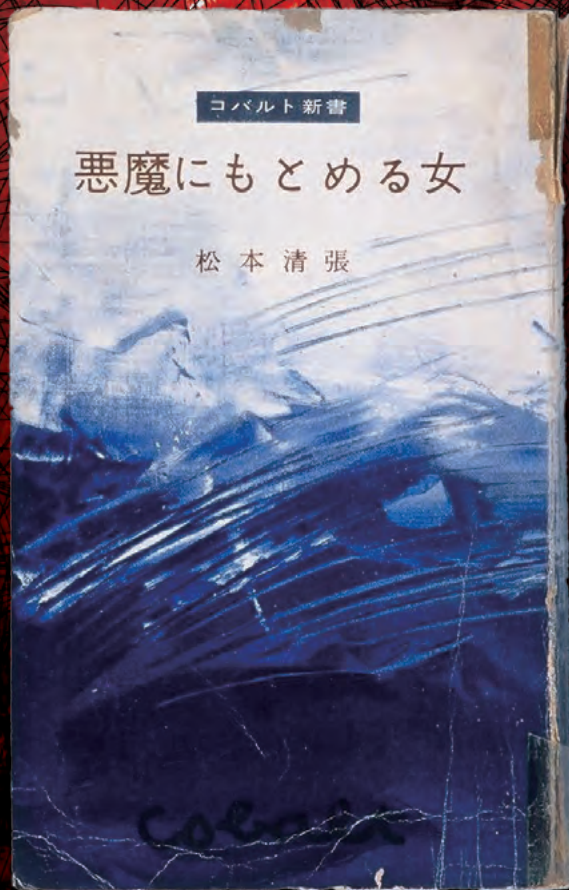
松本清張記念館

◆館報◆

2026.8
第78号

あなたが偉くおなりになればなるほど、
私との距離は遠ざかるのです。

本望です。



それによつていよいよ
あなたを愛しているのです。

現在入手しやすい本
『共犯者』 新潮文庫

「距離の女囚」[原題「女囚抄」]「悪魔にもとめる女」
右表紙は「悪魔にもとめる女」
昭和30(1955)年 コバルト新書

作品紹介

「距離の女囚」

「私」は高名な女子大の出身で、父は大きな印刷会社を経営している。婿養子のための縁談はたくさんあったが、「私」の気に染まなかった。

しかし、「藤川」との見合いで「私」は目ぼれた。「藤川」は考古学の研究者で、商売人の父にとって結婚相手として不服であったが渋々承諾をした。

「藤川」は家業の印刷業に励み、研究は帰宅してから続けた。だが、恩師の石井先生に触発され、しだいに研究に没頭するようになり、仕事に支障がでるようになる。

「藤川」は父と衝突し、家を出た。「私」は「藤川」を愛していたが、絶対の存在の父親には逆らえず、「藤川」と一緒に出ていく勇気がなかった。

その後、父は脳溢血で倒れた。家業で頼りとしていた支配人に「私」は犯され、情婦のようになり、転落していく。

離れば離れるほど、「私」の元夫への思いは強くなる。女囚にまで転落した女性の愛の形を描く書簡体の小説である。

(企画係長 久富友嗣)

目次

ミステリ作家トークショー	2
松本清張研究会・第50回研究発表会	6
特別企画展	10
友の会だより・フレグランス	11
トピックス	12

ミステリ作家トークショー

登壇作家

竹本 健治
北村 薫
有栖川 有栖

令和8年2月22日(日)午後3時
J・COM北九州芸術劇場 中劇場
参加者 363名

和田芳恵への「恩義」と

若き日のつながり

竹本 最初に私の方から、今回のトークショーが実現することになった経緯を説明しておきます。そもそも私の家内が主催している「ミステリー作家たちの横顔展」を松本清張記念館に持ちかけたのがきっかけでした。その時に「ついでにトークショーもやれないか」ということになりました。有栖川さんに相談したんです。そうしたら、「北村さんが松本清張に関して喋りたいことが溜まっている」という話を耳にしました。北村さんは清張への造詣が深く、泉のようにお話が湧いてくる方ですから、これは絶対に素晴らしいものになるだろうということで今回実現いたしました。私の今回の役割は、このお二人の面子を揃えたことでほとんど果たされたかと思っておりますので、あとはよろしくお願いいたします。

北村 松本清張記念館に今行ってきたばかりなんですけど、本当に素晴らしかったですね。**有栖川** 私は今回が2回目です。1回目に行った時も圧倒されました。清張先生のご自宅にあった蔵書や書庫、書斎がそのまま再現されているエリアがあって、そこが全体のクライマックスになっています。久しぶりに行きましたが、やはり感激しました。

北村 私は館内で、清張先生宛ての「2枚の

葉書」の実物を見ることができて、「すごいな」と深く感じ入りました。まず1枚目は、和田芳恵さんという作家の方からの葉書です。和田さんは「樋口一葉研究」で有名で、短編「接木の台」などで高名な賞も受賞されている小説家です。まだ清張先生も和田さんも全然名前が売れていなかった初期の時代、清張先生の活躍を見て和田さんが出した葉書が記念館に展示されているのですが、それを見てうーんと考えさせられました。

元文藝春秋の有名な編集者だった高橋一清さんのエッセイ『編集者魂』に、ちよつといい話があるんです。こんな一節です。

「和田さんの葬儀は、築地本願寺で行われた。当時、所属していた『オール讀物』編集部校了の日と重なりままならず、やつと都合がついて駆けつけた時は、式が終わり遺影をはさんで参列者が記念写真をとられる、そのフラッシュが光った時であった。列がくずれ、片付けの始まったところで遺影の前に行き、手を合わせた。そして帰ろうとして、通路に出た時だった。そこに松本清張さんが立っておられたのだ。『高橋君、和田さんのいいお世話をしてくれただけだね、ありがとう』清張さんにお礼を言われたのは、後にも先にもこれだけである。清張さんは『或る小倉日記』伝で芥川賞を受賞されるが、この作品は『三田文学』に載った。和田さんは、木々高太郎さんに頼まれ、その編集を手伝っ

ていて、九州から送られてきたこの作品が掲載されるように力を尽くした人なのである。この恩を清張さんは大切にしていた。何とかしてこの恩に報いたいと清張さんは心に掛けていた。清張さんに『文豪』という作品がある。明治の作家たちのことを書いたもので、こうした文人たちの調べごとに、和田さんをたよりにしておられたとうかがったことがある。何かにつけて、和田さんのことを気遣っておられたようである。」

若い、何者でもなかった頃からのつながり。そして葬儀のとき、通路で止まって声をかけた松本清張先生の「高橋君、和田さんのいいお世話をしてくれただけだね、ありがとう」という一言。これはちよつと、本当にいい場面だなと思います。記念館では、その和田さんからの生の葉書を見ることが出来ます。

清張が隠し持っていた

「本格ミステリーへの愛」

北村 もう一つの葉書の話に行く前に、有栖川さん、清張先生は実は「本格ミステリー」がお好きだったよね。

有栖川 どう答えたらいいのでしょうか。日本の推理小説の歴史を見たら、昔は名探偵やトリックといったものが一部の物好きな人たちの中心に「探偵小説は面白いね」と言われていた。そこへ清張先生が登場して、「いや、もつと人間や社会を描けるじゃないか」と。推理小説を、化け物屋敷みたいなオドロオドロしいものから、広範な読者の心に届くものへとつくりかえる革新を起こしたわけですね。それによって、名探偵だのトリックだのと言っていた従来の本格ミステリー小説は「古臭いもの」として一旦退けられました。今でこそまた本格ミステリーが盛んに書かれています。歴史の中で一旦流れを清張先生が絶つたため、本格の側から

見ると「社会派」松本清張「我々の敵」みたいな認識もあったんです。でも、丁寧に読むと、清張先生が本格ミステリー的なものをする事に否定的で全部作り直していったかというところではない。「本格ミステリーがお好きですね」というところが随所に見られる。そこに気がつくとも面白いです。

北村 子供のよう、非常に変なトリックを考えて喜んでいいるところがあるんだよね。不思議だよね。

有栖川 清張先生は「従来の探偵小説は幼稚だ」「若いうちはトリックに吃驚するのでもいいけど、大人になったら卒業しろよ」とお考えだったようです。確かにあまりにも子供じみてどうかと思われるものもありますが、そこにはそこにはしかない豊かな楽しみがある。そう思っ読むと、清張先生は否定しているどころか、結構トリックが好きなんじゃないかと。自分でもやっているんですよ。やっ、いろいろな失敗もしているんだけど、その失敗の仕方が読んでいて楽しかったりします。

北村 ネット上にいろいろんなネタを書いている、それを思いがけないようなところでもどんどん使っていた。有栖川さんとも話したけれど、清張先生は『黒い手帖』の中で、推理小説の発想として、嬉々としてこんなことを書いています。『私は、被害者が自分の死体の入る行李を担いで上野駅の小荷物係の窓口に見られ、これを託送した二日後、東北本線の小駅で同じ行李に死体となって現われるトリックを考えた』これで大喜びしているのですよ。もう本当に嬉々として書いています。有栖川さんといえば、鮎川哲也先生の『黒いトラック』とかがすぐ浮かぶので、「清張先生、こんなトリックをやっているのか」と思っ私は電話したんです。「清張先生が『死



の発送」でこんなを書いてるそうですが」と有栖川さんに連絡したら、「それ、私読みましたよ」って。

有栖川 この作品は清張作品にしては珍しいことに、連載終了から20年ほど本にならず、私が20代の頃にようやくカドカワノベルズで刊行されました。荷物を上野駅で発送した男が、東北のある駅でその荷物が着いた時に、中から本人が死体で出てきたら吃驚するじゃないですか。「こんな不思議なことってあるの？」って。でもね、途中でトリックはどうでもよくなった。北村さんに感想を聞かれて「読みましたよ。途中でどうでもよくなった」って言ったら、「そんなことないだろう、こんな面白そうな話がどうでもよくなるとはどういうこと？」と返されて。今の北村さんの紹介通りのことが本の帯に書いてあるんですけど、実際は違うのです。その男が上野駅で荷物を発送して、東北のある駅でその荷物が下ろされた後、犯人がどこかで荷物を受け出して、その「後」で男を殺して中に入れているから、不思議でも何でもないんですよ。

北村 ちょっと考えると、やりたくないっちゃうのね、清張先生。

有栖川 でも、「何か不思議なことをしたいのだな」という、清張先生の無邪気な気持ちは伝わります。

北村 もちろん出だしとか、小説としては非常に見事なんですけど、本格をやるうとするって崩れてくるっていうところがね。

有栖川 この小説、トリックはどうでもいいと言いましたけど、面白いところが随所にあるのですよ。競走馬の輸送の話なんかが出てきて、そんなディテールを読むだけでも読み応えはある。じゃあ、謎解きとして見た場合は「何で得意でもないのにやつちゃうのだろう」という。逆に言えば、これ、よっぽど本格が好きなのだろうな。

北村 やはり少年のような心で、若い頃から戦前の雑誌『新青年』などを読んでいて、そ

ういうものに対する不思議なワクワク、おもしろさを見るような喜びがあるのでしょうか。他にも、井上ひさしさんとの対談「清張作品の魅力」の中で、「海底の自動車の中で2人が死体となって発見される話を考えたんだ。心中ではなく殺人なんだけど、そこで誰にも考えつかなかったトリックが使われるんだよ」って松本先生が喜んでる。非常に本格ミステリーふうな思想なんです。清張先生の凄腕ところは、例えば本格の若い作家が書いたらどうにもならないような変なトリックを使った『家紋』という作品があります。これに出てくるトリックなんか、もう噴飯物ですよ。ネタバレになるから喋れないけれど。

だけど、これが傑作なんです。小説の力、描写の力で本格ミステリーのおかしなところを全部ねじふせて、闇の恐怖がそくそくと伝わってくる。ここに松本清張の偉大な小説家としての力が出てくる。誰が書いても著にも棒にもかからない変なトリックが、清張先生が書くことと見事になってしまふ場合もあるんですよ。

有栖川 「化け物屋敷みたいなけおどしの探偵小説ばかり書いてんじゃないよ」という清張先生の言葉は、本格探偵小説が嫌いで蹴飛ばしたんじゃないかと、「どうせ書くなら小説としてちゃんと書いて欲しい」ということだったんだなあと。清張先生は小説としてごく立派に書くのですが、トリックがちよつと凡庸だったり、ずれていたりする。

傑作『点と線』への激怒、そして「聖地巡礼」

北村 私は、まだ小説の構造をあまり考えてない中学生の頃、貸本屋で『点と線』を借りてきて読んで、本当に本を投げつけたくらいでした。その頃は鮎川哲也先生とかを読んでいたから、本格ミステリーのものさしで計ってしまうんですね。

有栖川 アリバイトリックにばかり注目しますからね。

北村 幾らなんでもアリバイもので「最後のあれ」というのは、本格の決まり事としてやつてはいけないタブーなんです。「あの時代にはそれでよかったのか」という後年の感想文を見ることがありますが、そんなこと全然ない。あの時代の雑誌『宝石』の同時代評を見ても、「これはないだろう」という批判ばかりですよ。本格ミステリーファンも当時激怒しています。だけど、こちらにもそくそくとして恐怖が伝わってくる小説の凄さがある。ただ、本格ファンとして読むと、共犯があんな形で使われるというのは本来タブーなんです。1人でやるからこそ不可能性が出てくるわけで、特に北海道に行くあたりでの共犯の使い方はめちゃくちゃです。

有栖川 部下に手伝わせた、的なことでもうね。

北村 それだったらアリバイなんか何でもできちゃうんですね。本格ファンは激怒しました。しかし、小説として読めば、百人のうち2、3人しかいない本格ファンが怒っている裏で、97、98人の一般読者が喜んで読んでいるわけです。

有栖川 何でもそうですけど、「ちゃんとしたものです、いいものです」と言っても、ごく限られた波長の合う人しか引きつけられないものと、それ以外の多くの人が寄ってくるものって別ですからね。『点と線』に関しては、私も最初に読んだ時は「なんじゃこれは」と思いました。アリバイトリックに期待して読んでいるから「こんなトリックは駄目だ」と。ところが後年、文春文庫から『点と線』が出るときに「文庫解説を書いてください」と言われまして。中学生の時にあんなに激怒した本の解説を、私が書いていいの？他に適任な方がいっぱいおられるのに、と思ったのですが、言いたいことを言うチャ



ンスだなどと思って書かせていただきました。ものすごく魅力があるんですよ、あの小説には。今思うと、何に腹を立てていたかというところ、魅惑がいつぱいあるのに、『点と線』を褒める人って、えてしてくだらんことを言うんですよ。「トリックがすごい」とか「時刻表ミステリーの傑作」とか。そんなふうに言われたら、ミステリーとしては下の方ですよ。「空白の4分間」にもまるで納得がいけない。東京駅の空白の4分間というのは、あの当時『旅』という雑誌に連載されていて、編集部に教えてもらった豆知識を入れたものですが、本当は作中に組み込まない方がよかったんですよ。ただ、豆知識としては面白い。このホームとこのホームの間は、いつも列車が出たり止まったりしているから、二つ向こうのホームを見渡せるのは東京駅では1日に4分間しかない。その4分を犯人は利用したと言えけれど、実際は利用しようがないんですよ。むしろ反対に、「たった4分しかないのにあの男女を目撃した者がいる。これは仕組んでできるはずがない、偶然だ」とする方がロジカルなのですが、何か変なことを書くんですよ。でも、あの小説の中に「4分間」というのが問題になる場面がもう一つあって、そこはあんまり世間から褒められないんですけど、そこが本当に怖い。舞台は福岡の香椎浜のあたりですね。私は『点と線』をすごく叩いているみたいですけど、実はその魅力に引かれて、香椎浜に行ったことがあるんですよ。2年前、竹本さんに佐賀のミステリーイベントにお呼ばれしたとき、大阪に帰るまでに1ヶ所ぐらい寄り道できるなと思って、博多で降りて香椎浜を見に行こうと。聖地巡礼です。歩いてきました。「西鉄の駅がここで、JRがこっちで。小説に出てきたのはこの辺だ、なるほどなあ」と思いながら。

竹本 『点と線』は僕も割と最近読み返したばかりで、印象がまだ新しいんですけど。確かに二つの電車の駅がこうあって、「この男女のカップルは、こっちの駅からこう行ったのか、あっちから行ったのか」という、その辺の書き方が何かこう、すごく薄気味悪いですよね。

有栖川 あそこ怖いですよね。探偵小説的というか、あの謎めいた感じを推理小説の側は大好きです。

竹本 あそこは非常にいいなあと思いました。有栖川 香椎浜で犯人と被害者が歩いた道を、昼間でですけど歩いてみて。しみじみと、「どんな気持ちで歩いたのだろう」と考えさせられました。

北村 子供の時に読むと、東京駅の4分間について「こんな不自然なことをわざわざやるから捕まるんで、こんなことする必要全然ない」と考えます。要するに「犯人の都合じゃなくて作者の都合で、作者がこれをここに入れたいから書いているのではないか」という反感を持つちゃうんだけど、大人になって読んでいくと、病気の奥さんが時刻表を見てい

て、「彼女が頭の中でこれをどうしても使いたい」という、彼女の情念みたいなものを読み取れる。するとそこには、また別の意味合いが生まれてきますよね。

有栖川 けどそれは、非常に深い解釈でしょう。要するにあんなことをするのは狂っているんですよ。狂っているけれど、小説の中に「そういうことを発想してやりなさい」と言いそうな人物が出てくる。そこにスポットを当てて読むと、東京駅の空白の4分間は不条理なまでに狂っていることに理由がつく。そこまで解釈したら、すごく怖くなるんですけど。

清張短編の神髄と、木々高太郎からの「もう1枚の葉書」

竹本 そろそろ清張さんの短編の素晴らしさを言っておかないと。

北村 清張先生の短編はどれも素晴らしいですよ。小説家・清張の神髄が出てくるわけですよ。有栖川さんと文春の『オール讀物』の方で、清張先生の短編を読むアンソロジーのシリーズをやっているのですが、酒井順子さんの『松本清張の女たち』という本が話題になりましたよね。それで、今回のお題が「松本清張と女性」というテーマでどうか、というお話があったんです。

有栖川 我々2人の対談が入ったアンソロジーですね。宮部みゆきさんに入っていたいたものもありますが、その続きの第3弾が企画されているということでございます。

北村 清張先生が女性を扱った作品の中で、印象に残るものを3つ挙げると。これが『オール讀物』の夏号に出るんです。これから、その中で私が挙げた二つ目と三つ目の作品について、ここで先走って話しちゃうんですけど。

有栖川 今度『清張と女たち』という趣旨で、北村さん、私、酒井順子さんと鼎談すると。雑誌に載った後で作品自体も収録して文庫本にしましようという一連の企画があって、それに先走って、今日その一部を北村さんが語ってくださると。私もそれに反応しますから、雑誌で語らなければいけないことを先にここで喋っているみたいになるわけですけど。

北村 『オール讀物』の担当さんが「話してもいいですよ」と言ってくださったので。私が挙げた二つ目の短編というのは、『遠くからの声』という作品なんです。有栖川さん、再読してきてどうでした？

有栖川 私、清張の短編は全部肯定しますから、もちろんその作品もよかったですよ。

北村 私、好きですよ。宮部みゆきさんもアンソロジーに採っています。酒井順子さんは『松本清張の女たち』の「5 転落するお嬢さんたち」という章でこの作品を挙げて、こう語っています。「この小説で転落するのは、女子大出のお嬢さん・啓子。彼女は、姉が結婚すると、その新婚旅行先である中禅寺湖畔の宿へ突然訪ねてきて、一緒の部屋に泊まってしまう。その後啓子は、十五歳も年上の男の後妻になったかと思うと、若い男と筑豊へ駆け落ちし、そうこうするうちに炭鉱労働者と関係を持って出奔……。なぜ彼女は、こんな乱脈な男関係に走るのか、と考えた啓子の姉の夫は、最後に気づく。啓子は自分のことが好きだからこそ、姉夫婦と距離を取るために『すすんで転落していった』のだ、と」酒井さんは「当時は恋愛結婚が増えていた時代で、不器用な恋心を描いている。義兄への思いを、自ら痛みを身投じることによって忘れようとしている。東京の女子大出のエリート女性が筑豊の炭鉱労働者との情事に走るというギャップの大きさが、啓子の心の痛みの強さを示している」と書いています。

でも、私はこれを読んだ時に「えー、気がつかないの？ 何でそんなことがわかんない？」と思ったんです。宮部さんのアンソロジーを見返しても書いてない。この作品が

「何を下敷きにしている話なのか」ということは、あることを知っていれば明らかかなんですよ。

松本清張先生が非常に大変な恩義を感じている作家に、先ほど名前が出た木々高太郎という方がいらっしやいます。昭和30年代の雑誌『宝石』の中で、清張先生はこう語っています。松本清張という『点と線』が非常に有名ですが、カップ・ノベルズ版で単行本になった際、本文の間にいろいろな写真をポンポンと入れていく手法をとりました。あれは実は大きなヒントがあったと清張先生自身が書いています。「日本の推理小説にシンボロジ（象徴性）や独自の工夫を本格的に取り入れたのは、木々高太郎が最初だろう」と。木々先生の初期作品『折蘆』や『人生の阿呆』の巻中に挿入された1ページの写真（当時、日本人にとって宇宙旅行のようだったシベリア鉄道の写真など）の印象が強く自分をとらえ、後に自分の『点と線』でそのアイデアを勝手に継承したんだ、と言っているんです。

そこで、松本清張記念館ですよ。あの「もう1枚の葉書」の現物が見られるんです。

有栖川 ここが今日のハイライト、山場の一つですね。さっき見たところなので、興奮がまだ冷めやらぬところで。

歴史を変えた「葉書の誤読」

北村 清張先生が自分のデビュー作『西郷札』が賞に入ったとき、それを木々高太郎に送ったら、色良い返事の葉書が届いた。清張先生はその返事を「本格ものを書けと言われた」と受け取った、とエッセイ等書いているのですが……。実はこれ、清張先生の読み間違いだったんです。本当は「本格もの」ではなく、「この種のもの」と書いてあった。それを「本格もの」と読み違えたんです。これは非常に面白い。清張先生がなぜ雑誌『三田文学』に推理小説的な「火の記憶」を書いた





かというところ、この「葉書の読み違い」から始まっているんですね。私は新保博久さんから最初にその話を聞いて「えー!」と思ったんです。「西郷札のような文学的なものを書け」と言われたのに、読み違えちゃった。藤井淑楨さんが「清張 闘う作家「文学」を超えて」の中でそのことに気が付いて言ったのが最初だと思いますが、記念館にその葉書がありますから、ぜひ行ってみてください。この結果として本格ものと読むのか、この種のものを読むのか?」。

竹 本 それ、清張さん自身の人生を大きく変えるほどの間違いですね。

北 村 「本格ものを書け」と言われたら思った清張先生が、推理小説の意味だと考えて『三田文学』に書いたのが『記憶』(のちに『火の記憶』)です。木々高太郎の処女作に『網膜脈視症』という作品があります。私は高校時代に読みました。木々先生は心理学者です。で、精神分析の話が出てきます。人間の心の謎に迫った斬新な作品で、清張先生はこれを当然読んでいて深く感銘を受けたと思うんですね。それが『火の記憶』の、幼少期の炎の記憶というテーマに明らかに繋がっている。

有 栖 川 一言だけ文句を挟んでいいですか? 木々高太郎の『網膜脈視症』って、傑作でも何でもありませんよ(笑)。当時はフロイトだの何だのがすごく珍しかったのだと思うんですよ。いかにも、かじった知識をこれ見よがしに使うって理屈を書いている。

北 村 それ言っちゃあおしまいですが(笑)。

有 栖 川 木々高太郎という人は、直木賞の選考委員を戦後もやっていた方ですが、基本的に本格ミステリーをよく思っていないで、「推理探偵小説は芸術でなくてはならない」と言っていた人ですから。

竹 本 「推理小説芸術論」を唱えた人ですね。有 栖 川 だから、清張先生に「本格ものを書きなさい」なんて言うわけがないんですよ。

木々高太郎は「本格ものなんか誰も書かないほうがいいよ」と言いたいような人なんだから。でも、実際に葉書を見たら、「この種のものの」「種」の禾のきへんが、木(き)へんに見えるんですよ。「種」という文字が頭に浮かばなかったら、「本格」の「格」かなあと思つて読み違えてしまうのも無理はないな、と実物を見て思いました。

「永遠の女囚」と「距離の女囚」

北 村 話を戻しますと、私が思うに、清張先生の『遠くからの声』は非常に良い作品で、これは明らかに木々高太郎の『永遠の女囚』へのオマージュなんです。『永遠の女囚』は一度読んだら忘れられない作品です。妹が駆け落ちをして、最後には「お兄さん、……囚人になると、なんでも言えます」と、檻に入ることで愛を全うしようとする。清張先生は自作解説で『永遠の女囚』との関連については語っていません。「女性が恋愛を諦めて身をひく場合、自分で檻(絶対的環境)を設定することがある」とだけ言っている。

けれど、清張先生はもう一編、そのものずばり『距離の女囚』というタイトルに改題した作品(『女囚抄』)も書いています。これは木々先生の『永遠の女囚』の影響を受けていますよと言っているに等しい。作中に「東京の有名な女子大を出た翌々年に……」と出てくる古風な女性が、牢屋の中に入ることによって、報われない愛を達成しようとする。今時ではないけれど、我々の世代だとよく分かります。

有 栖 川 北村さんからその話を事前に伺って読み返したのですが、木々高太郎の『永遠の女囚』というのは、探偵小説的な発想ですよ。ね。「あの人を愛するがゆえに、いろんな手段を使って遠ざかるんだ」という。犯罪が作中に絡んでくるからこそ書けたお話です。対して、清張作品はそこから離れていく。犯罪

を抜きにしても話を書けるようになっていて、推理小説として完成させることにこだわっていない分、また別の小説的な膨らみが出ていていると思います。ただ、私が気になるのはね、この「あの人を愛するけれど近づけないから、非常識な方法を選んで自ら遠ざかる、檻に入る」というパターン。

これ、男がやるバージョンを見てみたいんですよ。男の狂い方、男の陶酔の仕方として描いたら、すごくミステリーになるんじゃないかと。「俺があんな娘に会えなくなるには、これをやればいいんだ」って、極端な話、犯罪をおかしてまで牢屋に入るような男の物語。いつも小説の中では女性が耐え忍ぶ側として描かれがちですが、どうして男バージョンがないのかに引っ掛かりを覚えます。

北 村 男バージョンはね、演歌の世界ですね。「別れることは辛いけど、仕方がないんだ君のため。別れに星影のワルツを歌おう」という。そういうことを自分の目で確かめるためにも、皆さん、私が編集した東京創元社の『木々高太郎集』をぜひ買って読んでみてください。

清張という「巨大な山脈」、そして古代史の夢

北 村 清張先生の凄さというのは、まさに巨人としか言いようのない幅広さです。森鷗外を語った有名な言葉に「森鷗外は、テーパーの太都である」というのがありますが、清張先生もまさにそれです。小説でなくても、例えば長編で一番すごいのはやはり『昭和史発掘』だと思います。歴史という巨大なプロットを清張先生の筆の力が描くとき、どれほどすごい作品が生まれるのかを如実に見せてくれた。松本清張というのは、巨大な山、山脈であると思います。

有 栖 川 皆さん、話についてくることができているんですか?

竹 本 北村さんの凄さがひしひしと分かったんじゃないですか。昨日の夜も3人でうなぎを食べながら清張についていろいろ喋ったんですけど、本当すごいんです。

有 栖 川 私が、松本清張作品は短編がみんな素晴らしいなと思いつつ、ちょっとあつて思うところは、作品に「夢がない」という点です。男も女も現実にとつて、出てくる夫婦も、つまらない夫婦ばかり。でもね、光が差していると思うのは、清張先生が「古代史」を語るときなんです。現代史は厳しい現実で終始して辛いものがありますが、古代史の伝説を現代の事件と絡めるような作品(『東経139度線』『火神被殺』など)は、「よくそんな無茶でロマンティックなことを思いつきましたね」と言いながら、こっちが笑顔になるような、先生が今「夢を見て推理小説を書いている」と感じられるものが何作もあります。

さつき松本清張記念館で、清張先生が自分で集めた発掘品などの貴重なコレクションに囲まれて、お部屋でくつろいでいる写真を見たのですが、それが一番いい顔をしておられるんですよ。本当にいい顔なさっている。

清張先生が古代史などの遠い歴史を扱ったのは50代からなのだと。40代になってやっと作家になって、「今まで結構ハードだったよ人生」というところから、時間を取り戻すようにバリバリ書き出して、地位を確立して、50代になってようやく、それまではそんな場合じゃなかった「夢を見る」という方面に活動の場を広げられた。苦勞していた時代にはできなかった取材や旅行が、ようやくできるようになったわけです。だから清張先生の人生には、古代史の方からやさしい光が注いでいたんだな、それが作品に反映されているんだなということを、今改めて思っています。

竹 本 お二人とも、本日は本当にありがとうございました。

記念トークショー

「松本清張の女たち」

酒井 順子

エッセイスト

研究会理事

田中 光子

トークショーの内容は、令和9年3月末発行の
『松本清張研究』第28号に掲載します。
お楽しみに。



松本清張研究会 第50回記念研究発表会

令和8年6月6日(土) 文藝春秋西館ホール 参加者約100名

研究発表

小説はいかにして社会と対峙したか

——石川達三から松本清張へ



講演者

山本 幸正

中国上海・復旦大学 教員
研究会会員

はじめに

二〇二五年の大学入試共通テストの「歴史総合、日本史探求」の試験で、漫画家の長谷川町子が『サンデー毎日』一九七一年三月二十一日号に掲載した「意地悪ばあさん」の四コマ漫画が登場し、話題になりました。

意地悪ばあさんが、「松本清張」と書かれた大きな屋敷で騒音を起こしています。清張が出てきて、「なんで執筆のジャマするの?」と尋ねると、意地悪ばあさんは、「女にセンキョ権があつてわるい?」とぶちまけます。すると清張は、「そりゃ石川達三だ!」とだけ言つて、引ッ込んでいくというストーリーです。

漫画の下に付けられた(注)に、「石川達三は芥川賞作家として著名な社会派の小説家で、この漫画が描かれる1か月前、女性に選挙権をもたせるべきでないとして論争を呼んでいた」と書かれています。石川は戦後を代表する「社会派の小説家」の

ひとりでした。そして、清張もまた推理小説の分野で「社会派」を創始した人物として、名を馳せていました。同時代の読者にとって石川と清張は、ともに社会に意見をいう、あるいは社会を問題化する作家として、容易に混同されてしまうほど似かよっていたのでしょう。

実際、一九七三年二月、『オール読物』で、清張は石川達三と「文壇の『社会派』大いに語る」という対談をおこなっています。一九〇五年生まれの石川と、一九〇九年生まれの清張は、年齢差はたった四歳ですが、文学者としては、石川の方がずっと先輩でした。小説家として認知されるずっと前から、清張は石川の作品を読んでいたようです。

この研究会の代表理事をされている山田有策先生は、「石川達三と松本清張」(『国文学解釈と鑑賞』二〇〇五年四月)で、「二人に何かしら共通するもの」がある、石川は「松本清張の先を行く作家だったのである」と指摘なさっていました。

戦後日本の文学のみならず、その社会を考えようとするとき、松本清張はとても重要な存在です。一九九二年に逝去されたのちも、その影響力は強く、いまでも

書店には文庫本が並んでいます。それに對して、戦後のベストセラー作家であり、「社会派」として大きな影響力をふるった石川達三は、『生きてゐる兵隊』などの戦争小説が文学研究の分野で取り上げられることはあっても、ほぼ忘れられた存在となっています。しかし、「社会派」としての清張を考えようとするとき、先達としての石川の存在は、やはり無視することができないように思います。推理小説における「社会派」として認知されはじめた清張にとって、「社会派」の看板として屹立し、一世を風靡していた石川がどのような存在だったのか。それを考えることはとても大切なことであるように思われてなりません。

今回の発表では、同じく「社会派」として知られるふたりの作家を比較し、石川達三から松本清張への系譜を簡単に確認するとともに、ふたりのあいだに横たわる差異についてもお話することができたらと思っております。

新聞小説の黄金時代

石川達三の戦後の作品を考えるにあたって、まず確認しておくべきことは、一九四〇年代後半から五〇年代にかけて、新聞小説が黄金時代を迎えていたということです。

たとえば一九四八年の六月十一日の『読売新聞』には、「読売新聞小説賞」という記事が掲載されています。そこで強調されているのは、新聞小説と普通の懸賞小説、あるいは新聞小説と普通の「名篇力作」とはまったく異なるものであるということでした。新聞小説が非常に特殊なジャンルとして問題化されたのです。事実、第一回「新聞小説賞」には当選者が出ませんで

した。「文学の新分野」は、アマチュアには書くのが困難なジャンルであることが喧伝されるようになったといえます。

石川は一九五〇年一月二十三日の『読売新聞』で、新聞小説の特殊性について述べています。たとえばそのひとつに、小説を目的としない読者を相手にしなければならぬということがあげられています。文芸誌などの読者と違って、新聞の購読者が小説を目的に新聞を買うことは決して多くありません。また、ふだん小説を読み慣れていないひとと少なくないはずです。そうした読者に対して、どのように対峙すればいいのか。これは簡単なことではありません。それゆえ石川は、新聞小説を書くことは、アマチュアにとってはきわめて困難なのだと書いています。

一九五五年十月二十九日の『読売新聞』朝刊には、「本紙の朝刊連載小説五大作家が登場」という記事が掲載されています。この五人はたんなる小説家ではありません。新聞の読者を惹きつける新聞小説家として認知された書き手でした。ふつうの小説家とは異なるプロフェSSIONナルな新聞小説家という存在が、メディアのなかでつくりあげられていったともいえます。そうした新聞小説家のなかでも、石川達三はどうやら特別な地位を占めるようになっていったようです。

石川の新聞小説「四十八歳の抵抗」について、小田切秀雄が『日本読書新聞』（一九五六年六月十一日）に「石川達三の拓いた領域」という文章を寄せています。「四十八歳の抵抗」は「新聞小説およびマス・コミュニケーションの新しい領域をひらいたものといわねばならぬ」と高く評価されています。当時の新聞小説家のなかで、石川は特異な新聞小説家として

地位を確立していたのです。

物申す新聞小説家

新聞小説家として特別な存在であると認知されるにつれ、石川は単に小説を書くだけの存在ではなく、物申す新聞小説家になっていきました。これはとても重要なことだと思っています。

たとえば、一九五六年の四月二十四日から七月二日、石川はアジア連帯文化使節団の一員として、ソ連や中国などを訪問しました。帰国後には、『読売新聞』で「外遊断片」、「朝日新聞」では「世界は変わった」というエッセイの連載を始めています。その連載を受けて、新聞を中心とした当時のマスメディアのなかで「自由論争」が起りました。

石川は連載エッセイで、戦後の日本は統制という言葉を書きすぎたために自由になりすぎて、新しい日本を建設できないでいるのではないかといった指摘をしました。そのうえで、自由をちゃんと制限しなければいけない、「自由主義国家はもう古いと思った」、「ソ連や中国はすばらしい」という感想を開陳しています。こうした石川の見解に対して、当時、反論が寄せられ、新聞はもちろん、週刊誌などにおいても大きく取り上げられる論争となったのです。

私は石川のこのような姿を見ていると、もしいまの時代に生きていたら、おそらくワイドショーに出てくるコメンテーターになっていたのではないかと想像してしまいます。あるいは、SNSなどで炎上しやすい意見をわざと発信して、インターネット空間をざわつかせていたのではないのでしょうか。石川は、その時々状況において人目を引きやすい問題を提

起して、マスメディア全体を巻き込んだ論争を惹起し、そうすることでより大きな存在になっていったのではないかと私は考えております。

石川の批判は、いま社会主義国で生活している私からすると、理不尽としか言いようのないものです。にもかかわらず、その発言は看過しえないものとして、メディアをにぎわしました。そうした石川の影響力の大きさを端的に表現した言葉として印象深いのが、「妖気」です。読売新聞のマスコミ欄に載ったものです。

アジアにかえれ、と、石川達三がまた一発空気をぶっぱなした。なんの新味もないし、もう日本の「進歩的」知識人たちの標語のようなものでもあるが、石川が一発すると一まつ妖気がただよう。それほどわが石川は時の人気スターなのである。

炎上商法めいた石川の発言の核心をついたコラムです。こうした「妖気」を考えるにあたって、重要な参考文献が二つあります。

まず、一九四九年三月の『思想の科学』に掲載された「新聞小説の分析と批判」という特集です。石川達三の新聞小説「望みなきに非ず」が取り上げられています。たとえば「望みなきに非ず」合評会」で、法学者の川島武宜がこのような指摘をしていました。

民衆は法律を知らないことを自慢に法律を知らないことが社会的に徳高き人として評価されがちであるという、精神的雰囲気があればこそ、こういう間違いの法律論に基いて小説を組み立てても誰にもあやしまれ

ずに小説としてのベストセラーとして通ることですね。「中略」民主主義は思想的アナキーを作りだした。「中略」民主主義はダンスをはやらせて女を解放して墮落させた：等々の考えは、広く民衆の間に「中略」ともかく民衆の中に根をもっていることは事実らしい。

こういう指摘は、いまの時点から考えても重要です。「望みなきに非ず」を評価した読者のなかには、法律などの難しい知識や教養を軽蔑する「反知性主義」が非常に蔓延していたようです。そうした「反知性主義」を満足させるような小説を書いたのが石川だったのではないかと、川島は述べているわけです。

もうひとつは山本健吉という文芸評論家が書いた「石川達三」（『群像』一九五一年九月）という評論です。山本によれば、石川のお説教は、「多数者が考へつき得るやうなこと」にすぎません。それは「そのまま読者が自分の考へとして信用」できるものです。石川の小説には、読者が「氏こそは自分の代弁者に外ならぬと信じこむやうな仕掛け」があるのだと、山本は述べていました。

この指摘は、石川の新聞小説における戦略を見事にいいあてているように思います。石川は、決してすべての読者を理解させ満足させようとはせず、すべての読者に認められようとも考えていませんでした。あくまでも新聞読者の「多数者」、すなわち最大多数のマジョリティに向けて、自分の意見を書くという戦略をとっていたのです。

さらに山本は、石川が「意識的な教育的な役割」を果たしていたことも指摘しています。「一行一句の輝いた言葉をも持つ

てゐない氏の作品の強み」は、読者に教えてやるという啓蒙家としてのふるまいによってもたらされたものだったのです。

では、なぜ石川にそのようにする権利があるのかといえば、自分には「百万人の読者」がいるから、というのがその理由です。山本は、「氏は常に多数者とともに在ることを己れの正義の証しとします」とも書いていました。なにやら、自分にはたくさんのフォロワーがいるから正義なんだと主張する、ユーチューバーやインフルエンサーを想起させます。たくさんフォロワーに支えられている俺に逆らえるのか、という堅固な論理を石川はつくりあげたのです。

ここで注意すべきは、石川の言説のなかでは、マジヨリティ（一般大衆）と知識人が完全に区別されて、石川はマジヨリティの側から知識人を批判するという戦略を立てていることです。そのうえで、マジヨリティの「代弁者」として知識人の知性主義を批判するのです。しかし、もちろん石川自身は一般大衆ではありません。あくまでもマジヨリティが言語化できない考えを言語化してあげるんだというかたちで、「多数者」の「代弁者」という役まわりを意識的に演じていたように思います。

このような石川達三の小説を松本清張も非常に読んでいました。では、清張は石川からなにを受け取ったのか。また、なにを受け取らずに独自の道を進んでいったのか。そのことについて、少し考えてみたいと思います。

松本清張の新聞小説

文芸評論家の荒正人が『現代の英雄小説家』（一九五七年六月）で、こんなことを

書いています。

小説家は、反逆者から英雄に変わってしまった。マス・コミュニケーションの王者でもある。「中略」現在、流行作家としてあげられる人は、かんとんにいえば、新聞小説の常連である。

この「現代」の「英雄」、すなわち新聞小説家への道を松本清張は着実に歩んでいきました。最初は地方紙での発表（『野盗伝奇』）、そのあとブロック紙（『黒い風土』）、そして全国紙夕刊に「砂の器」を発表しました。これが大成功し、その直後に「落差」という小説で、新聞小説としては最高峰の舞台である全国紙の朝刊にのし上がりました。

清張がなぜ新聞小説という特殊な舞台でも成功することができたかという点、やはり新聞小説の特性をよく理解したうえで、効果的な読者戦略を採用したからではないかと思われまふ。

たとえば新聞に発表された松本清張の小説を読んでいると、作中人物に新聞を読ませるという場面に、しばしば出くわします。これは作中で新聞を読んでいる視点人物と、新聞小説を読んでいる読者を身体レベルで重ねようとする戦略であるとみなせます。読者は、視点人物の視点を自分のものであるかのように感受し、知らず知らずのうちにその人物に感情移入してしまうことになりまふ。

もちろん、この作中人物に新聞を読ませるという方法は、松本清張の発明ではありません。夏目漱石の作品にもあります。おそらく石川達三も意識的に新聞小説の戦略のひとつとして採用しました。そして、その方法をさらにブラッシュ

アップさせたのが、松本清張だったのではないかと私は考えています。

たとえば「砂の器」で、主要な視点人物のひとりである今西栄太郎という庶民的な刑事は、しばしば新聞を読みます。彼は自分が新聞を読むことをおして、新聞に出てくる和賀、関川といった作曲家や評論家のニュースを読者に伝えます。今西、和賀、関川は、ご承知のとおり、「砂の器」の重要な人物なのですが、今西はあくまでも新聞を読む存在であり、和賀と関川は新聞をはじめとするメディアをにぎわせる存在です。すると、必然的に読者は新聞を読む今西の側に立たせられ、和賀と関川はメディアのなかで表象されるあちら側に追いやられます。こうした構造によって、読者は今西と視点を共有せざるをえなくなります。新聞を読むという行為を媒介にして、読者を誘導していく語りのつくりかたは、非常に洗練されたものになっているといえるのではないのでしょうか。

ここで、さきほどお話しした「反知性主義」という問題がかかわってきます。「砂の器」には、ときに難解な音楽評論が登場し、作曲家である和賀がつくっているのも、現在でも決して一般的とはいえないミュージック・コンクレートです。そうした評論や前衛的な音楽は、「砂の器」ではわけのわからないものとして提示されていきました。それでは、清張も石川と同じく「反知性主義」となるのかどうか。これは非常に重要な問題だと思います。

難解な文章が引用されている箇所を



ちよつと見てみましょう。

「これも、むずかしい記事でな。ほくが前に見たときもろくに読む気もなしに読んだんだが。……これだよ。」

彼はいま写してきた新聞記事を吉村に見せた。

「超硬質合金に穴あけ革命——強力超音波の応用……」

「むずかしい記事」であると視点人物に言わせています。読者は、超音波の議論を理解しなければならぬという知性の側ではなく、わからなくて当然だという側に立つことができます。これは「反知性主

義なきのかどうか。

ちなみに、こうした新聞記事の引用は、読者を獲得する戦略のひとつでもありました。「砂の器」が連載されていたときの『読売新聞』を調べると、超音波に関する記事がかなりあります。また、「和賀英良はこの発表会でも、そのモチーフを、仏教説話や古代民話などの東洋的瞑想、あるいは霊感的思想に求めた」といった内容の音楽評論が「砂の器」には見られるのですが、これに類した現代音楽を論じた評論も、「砂の器」連載時の『読売新聞』に散見されるものでした。読者は「あれ、どこかで読んだような記事だな」と思いながら、「砂の器」を読んだのではないでしょう。か。「砂の器」というフィクションのなかに引用されている音楽評論と、現実の新聞に掲載されていた記事は、同質のものとして読者に受けとられた可能性があります。フィクションと現実の垣根を溶解させてしまう役割を、こうした「むずかしい新聞記事」は担っていたのです。

石川達三と松本清張の差異

石川達三は『経験的小説論』で、『朝日新聞』に連載した戦後を代表する新聞小説「人間の壁」を回顧して、「途中三日間ぶっ続けて、議会の速記録をそのまま写し取った」と述べていました。それは新聞の読者にとっては読みにくいものだっただろうが、のちに単行本化されたとき、読み返してみたら「速記録の写しはしゃんと生きていた。それがそこに無くてはならないようなものになっていた」と誇らしげに語っています。読者にとってリアルダブルでない文章を長々と引用する点において、石川と清張はやはり共通しています。

しかしそこにはやはり大きな違いがあるように思われてならないのです。

「人間の壁」における「議会の速記録」を、石川は読者にわからせようとしています。速記録が小説の中で「しゃんと生きていた」というのであれば、読者はそれを理解しなければなりません。「むずかしい」ものを理解させようとする点において、石川は啓蒙家として教育的にふるまいます。それに対して、清張は読者に試練をあたえるような引用をする点で石川と共通していますが、読者に理解させようとはしません。「音楽のすべての主要なパラメーターにおける組織的変奏の作曲」といった内容の評論に対して、「何のことかさっぱりわからない」と視点人物である今西にいわせることで、読者は「さっぱりわからない」立場にとどまることが可能となります。

ここに、ふたりの「社会派」の大きな違いがあります。石川は「むずかしい」ものを読者に代わって理解する「代弁者」なのです。「百万人の読者」を代表するのが自分であるという自信が、石川にはみながっています。こうした「代弁者」としての側面が、清張には希薄だったように、私は考えています。

では、「むずかしい記事」などわからなくいいと読者に語りかける清張は、反知性主義だったのでしょうか。おそらくそうではありません。たとえば、清張の「火の路」（原題「火の回路」という新聞小説です。連載終了後に書かれた「火の回路」を終わって」という一文で、清張は次のように書いていました。

こうした「新説」を展開するにはどうしても説明が十分でなければ納得してもらえない。ヒロインを大学の

助手とし、説明を論文のかたちにしたのは、従来の学説を見ながら問題の提起とその論証をすすめる立場にしたかったからである。そのため、論文部分が意外に大きな部分をとり、普通の新聞小説らしからぬ体裁となったのは、なんとも恐縮のほかはない。読者と新聞社の寛容に感謝したい。

新聞というマスメディアを舞台に、松本清張は学者とか研究者に意見を求めるような論文を平気で書いてしまったのです。このような作家を「反知性主義」とみなすことはできません。

では、なぜ「砂の器」では「むずかしい記事」を理解しなくていいものとして提示したのか。それは、「むずかしさ」を退けようとしたのではなく、「むずかしい」音楽理論をふりまわす特権的な芸術家や評論家を批判するためだったと私は考えています。知性そのものを否定するのではなく、学歴などの権威に寄りかかった知性を清張は批判しようとしたのではないのでしょうか。

清張はしばしばみずから尋常高等学校卒であることを書いています。それを清張の「学歴コンプレックス」などと解釈してしまったら、重要ななにかを見逃してしまふことになるのではないか。もしかしたら清張は、みずからの学歴を方法として駆使したのではないのでしょうか。『反知性主義』におちいらずに権威主義的な知性を批判しつづけること。それが清張のねらいだったように思われてなりません。

清張も石川と同様に、いやそれ以上に、多くの読者から支持されました。しかし、「百万人の読者」の「代弁者」だった石川と

違って、清張は読者の代表として権威主義的にふるまうことはありませんでした。大衆を知性がない存在で啓蒙をしてやらないでほしい対象とみなすことなく大衆に語りかけ、結果として多くの読者を魅了しました。みずから権威づけるために、「百万人の読者」を利用することがなかったともいえましよう。

現在、日本はもちろん、私が住んでいる中国でも、いやおそらく世界中で、読者が多ければ多いほど偉い、フォロワーが多ければ多いほどすごいという考えかた、あえていえばポピュリズムが蔓延しています。今後、その傾向はますます強まっていくのではないかと思います。そうした状況を見るにつけ、石川達三と松本清張の差異を考察することが重要なのではないか、そんなふうに考えています。ふたりの「社会派」が生きた時代には、インターネットもSNSもありませんでした。しかし、現在の状況は決して前代未聞の新しいものではありません。石川も清張も、莫大なフォロワーをかかえていたといえます。とはいえ、ふたりのふるまいに大きな違いがあることも事実です。「百万人の読者」を権威として利用せず、反知性主義から離れて、なおかつ権威主義的な知性を批判しようとした清張は、いまの私たちにとって、ますます重要な存在になっているのです。

第50回記念研究発表会（記念館開催）の講演（綾目広治 ふうやま文学館館長「松本清張と井伏鱒二」）は次回「館報」に、孫平氏の研究発表は『松本清張研究』第28号に再構成して論文として、掲載する予定です。

松本清張記念館二〇二六年度特別企画展は、「黒革の手帖」展——交錯する欲望と社会の闇——を開催いたします。

『黒革の手帖』は、一九八〇年の刊行以来、多くの読者を魅了し、幾度にもわたる映像化や舞台化を通じて、世代を超えて読み継がれてきた松本清張後期を代表する作品です。銀行員であった主人公・原口元子が、黒革の手帖を手に人生を切り拓いていく姿は、単なるサスペンスや人間ドラマにとどまらず、金と権力、人間の欲望、そして社会の仕組みを鋭く見つめた物語として、今日もなお色あせることがあります。

本展では、創作の背景や作品世界を形づくった時代の状況、さらには歴代の映像作品や舞台作品、清張作品の女性像の形成などに着目し、多様な資料を通して『黒革の手帖』の魅力を多角的にご紹介します。松本清張が作品に込めた社会へのまなざしにも触れていただければ幸いです。

『黒革の手帖』展

——交錯する欲望と社会の闇——

展示構成(予定)

- 第1章 『黒革の手帖』、その成立
- 第2章 社会状況から読む『黒革の手帖』
- 第3章 女性像の系譜に見る原口元子
- 第4章 メディア化の系譜
- 第5章 『黒革の手帖』の現代性

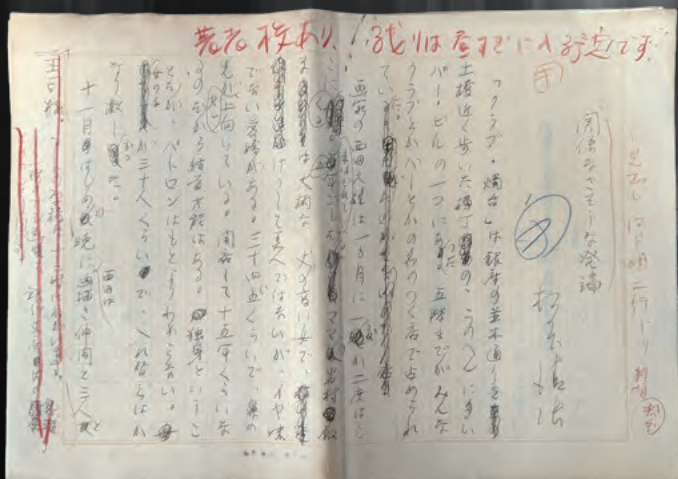
主な展示品

自筆原稿、挿絵原画、初版本、初出誌の他、創作ノート、テレビドラマポスターなど。



松本清張『黒革の手帖』上下巻 初版
(新潮社(上下巻)1980年6月)

2026年11月28日(土)～2027年3月14日(日)



『黒革の手帖』連載第1回原稿



作家と新聞小説

松本清張記念館友の会
会長 加島 巧



映画「国宝」は2025（令和7）年6月に上映が始まるやいなや、三時間近い上演時間にもかかわらず大きな話題を呼び、興行収入は2026年5月の時点で207億円を越えた。さっそく評判の原作に目を通した。『国宝』は朝日新聞に2017（平成29）年1月1日から2018（平成30）年5月29日にかけて連載された作品である。限られた字数の中で読者を毎日引きつけるためには、通常の連載小説とは異なる工夫が求められるはずだ。

読み始めてすぐ、作品に引き込まれた。最初からぐっと物語が動き出す。テンポがいい。明日はどのようなのかと読者に思わせる。たとえば第三章は次のように終わる。

そんな話があったとも知らず、喜久雄はこの日から、すっかり鶴太夫直伝の義太夫節の虜となっていくのでありますが、そろそろ今章のページも尽きますれば、その辺りのお話はまた、次章にてお付き合い願えればと存じます。

作家は単行本化にあたり、校正や書き換えを行い、作品の完成度を高める。この『国宝』の新聞連載版の最終回は次のように終わっていた。

その眩い照明がどれほど役者の心を痺れさせるか。その鳴りやまぬ拍手がどれほどの幸福感か。こればかりは舞台に立った者にしか分からぬのかもしれませんが。ですからどうぞ、声をかけてやってくださいまし。ですからどうぞ、照らしてやってくださいまし。ですからどうぞ、拍手を送ってくださいまし。日本一の女形、三代目花井半二郎は、今ここに立っているのです。 (了)

単行本化に際し、吉田修一はここに若干の変更を加えた。

愛想笑い一つできぬ、不器用な役者でございます。我が道しか見え、多くのお客さま方からお叱りも受けてまいりました。おそらく当代の人気役者としては失格なのでございましょう。しかし

それでもこの歌舞伎座の大屋根から見下ろしておりますと、その不器用な役者の姿が、父親の仇を討とうと、朝礼の最中に駆けだした、あの一途な少年の姿に重なってくるのでございます。ですからどうぞ、声をかけてやってくださいまし。ですからどうぞ、照らしてやってくださいまし。ですからどうぞ、拍手を送ってくださいまし。日本一の女形、三代目花井半二郎は、今ここに立っているのです。 (完)

主人公が中学の朝礼で起こした事件を結末に付け加えることで、物語の冒頭と結末がみごとに呼応するようになり、作品全体の構造がより引き締まった。

松本清張が最初に書いた新聞小説は「野盗伝奇」である。共同通信の配信により地方紙の夕刊に掲載された。1956（昭和31）年のことで、115回にわたって連載された。張り切って書いたに違いない。「野盗伝奇」を読むきっかけは、長崎県諫早市の鎮西学院大学で「英語翻訳」の授業に「地方紙を買う女」を用いた時のことだ。

東京に住む潮田芳子が『甲信新聞』を定期購読しようとしたのは、「野盗伝奇」が連載されていたからである。しかし一ヶ月後、芳子は購読の更新を止め、「小説がつまらなくなった」と新聞社に手紙を書く。

では実際のところ「野盗伝奇」はどうであったのか。読み始めると、松本清張の文章にすぐに引き込まれた。物語のテンポの良い進み具合。明日の新聞はどのようなのかという期待感。新聞連載で読んだわけではないにもかかわらず、新聞小説特有の魅力が余すところなく伝わってくる。

この読後感をどう表現すればよいのかと考えていたところ、池井戸潤の二年ぶりの新作『ブティック』（ダイヤモンド社 2026年）の広告が目に入った。「読み出したら止まらない疾走する読書体験!」とある。そう、この感じ。恐るべし松本清張。

● 友の会 会員更新と新規会員募集のお知らせ ●

松本清張記念館友の会は、8月1日から翌7月31日までを1年間として、多彩な事業を実施しております。年会費は3,000円です。皆様のご入会をお待ちしております。

友の会入会のお申し込みは、松本清張記念館友の会事務局まで

TEL. 093-582-2761



松本清張の世界を香りで辿る ルームフレグランス Three Scents

発売

国内外で活躍する調香師・氷室美里さん（北九州市出身、山梨県在住）と当館とのコラボレーションにより、作家 松本清張とその作品に登場する女性像をイメージした3種のルームフレグランスを制作しました。

清張の人生の奥深さにインスピレーションを受けた「Black」、表向きの慎ましさと内に秘めた強さを持つ女性をイメージした「White」、美しさと危うさ、近づくほどに深みを増す陰影のある女性をイメージした「Red」。三つの異なる香りからひとつを選ぶ。その迷う時間も体験としてとらえることから、3本を1セットとして販売します。



販売価格 13,200円（税込）

販売場所 松本清張記念館ミュージアムショップ
Parfum HMオンラインストア



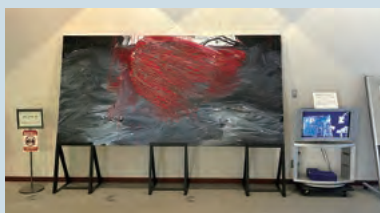
お知らせ

黒田征太郎氏 画『ネムルライオン』
ライブペインティング映像 追加展示

画家・黒田征太郎氏による『ネムルライオン』のライブペインティング映像を新たに追加展示しました。

映像は、2009年9月25日に当館で開催された松本清張生誕100年記念イベント「松本清張を視る×聴く 近藤等則×黒田征太郎ライブ」の記録映像(86分)です。

長年の盟友であり、世界的に活躍したトランペッターの故・近藤等則氏が奏でる鋭く情熱的な音色に応えるように、黒田征太郎氏がキャンバスへ渾身のエネルギーをぶつけ、『ネムルライオン』を描き上げていく瞬間が収められています。



朗読・ミュージック・おしゃべりサロン

令和5年7月から、毎月1回、当館館長と地域の音楽家や朗読家など有志が集まり、企画展示室やSEICHOカフェで開催しています。清張作品に関連した古賀館長のオカリナ演奏は参加した皆様に好評いただいています。



第28回

松本清張研究奨励事業
入選企画決定

企画名 社会主義ハンガリーにおける
松本清張作品のメディア横断的受容

入選者 サボー・ジュジャンナ
(京都大学大学院 人間・環境学研究科博士後期課程修了)

企画名 松本清張と演劇
— 清張作品の上演に関する基礎的研究

入選者 赤井 紀美(東北大学文学研究科 准教授)



イラスト:山藤 章二

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093(582)2761
FAX 093(562)2303
<https://www.seicho-mm.jp>
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00(入館は午後5:30まで)
- 休館日 毎週月曜日(休日の場合は翌日)、
年末年始(12/29～1/3)、館内整理日
- 観覧料 一般/600円(480円) 中・高生/360円(280円)
小学生/240円(190円) ※()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩20分 西小倉駅から徒歩10分
小倉駅からバスをご利用いただくとも便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)
車: 北九州市高速 大手町ランプより5分

講演に行ってきました

期間: 2026年3月13日～2026年7月15日

1	3月13日	八幡西区・年長者研修大学校穴生学舎 (シニアライフデザインコース・第2回)
2	3月17日	小倉北区・JR九州ステーションホテル小倉 (小倉工業倶楽部「合同例会」)
3	3月22日	八幡東区・旧百三十銀行ギャラリー (「松本清張の知られざる世界とオカリナ演奏」講演会)
4	4月 2日	小倉南区・ふれあい家族ケアプランサービス (「(有) 故郷 ふれあい家族 認知症予防教室」)
5	4月 3日	松本清張記念館(生涯現役夢追塾3期同窓会「みよし会」)
6	4月 6日	八幡西区・コムシティ(黒崎文化サロン「4月お話し会」)
7	4月25日	若松区・高須市民センター (高須地区社会福祉協議会創立40周年記念事業)
8	4月27日	小倉北区・年長者研修大学校周望学舎(ふるさと文化コース)
9	4月28日	松本清張記念館(日鉄エンジニアリング(株))
10	5月 2日	松本清張記念館 (オリジナルルームフレグランス『Three Scents』お披露目会)
11	5月13日	門司区・旭興産(株)クラブハウス(交流会)
12	5月16日	松本清張記念館(八幡東区・枝光市民センター「学び舎えだみつ」)
13	5月27日	八幡西区・八幡西図書館(「読書人クラブ」対談)
14	5月31日	松本清張記念館 (「(社) 生き方のデザイン研究所」インクルーシブボランティア研究者研修)
15	6月 3日	松本清張記念館(インドネシア大学生受入研修)
16	6月 7日	東京都中野区「&tenna」 (オリジナルルームフレグランス『Three Scents』お披露目会)
17	6月 8日	戸畑区・西日本工業倶楽部(西日本工業倶楽部「むつみ会」)
18	6月 9日	松本清張記念館(八幡東区・枝光市民センター「枝光南なごみ本舗」)
19	6月16日	小倉北区・北九州銀行協会 (「(一社) 北九州銀行協会」拡大代表者会)
20	6月18日	八幡西区・上津市民センター (生涯学習市民講座「アクティブライフ」)
21	6月24日	東京都杉並区(「有」SN企画、松本清張先生の元書斎での献奏)
22	7月 2日	門司区・門司生涯学習センター (門司区婦人会連絡協議会「令和8年度 もじ女性セミナー」)

●編集後記●

今年度の特別企画展は、11月28日(土)～3月14日(日)まで『「黒革の手帖」展—交錯する欲望と社会の闇—』を開催します。清張が描いた人間の業と、昭和から令和へと受け継がれる作品の魅力をご堪能ください。スリリングな傑作サスペンスの舞台裏へ、皆様のご来場を心よりお待ちしております。(Y.K.)

